令和七年度入学試験問題　国　語（五十分）

二月一日（午前）　実施

〔注　意〕

一、試験開始の指示があるまで問題を開いてはいけません。

二、問題冊子は14ページあります。試験開始後すぐに確かめてください。

三、解答はすべて解答用紙に記入してください。

四、問題冊子の表紙及（およ）び解答用紙に受験番号（算用数字）と氏名をはっきり書いてください。

五、字数制限のある場合、句読点・カッコなどはすべて字数に数えます。

六、試験終了後、解答用紙のみ集めます。問題冊子は持ち帰ってください。

七、試験中、机の上から物を落としたり、気分が悪くなったり、何か用ができた時は、手をあげて監督（かんとく）の先生に知らせてください。

受験番号

氏　名

東京女学館中学校

一　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

十六歳の「俺」は、先輩の奥さんが、出産で入院している一ヶ月間、先輩の一歳の娘・鈴香の世話を日中するアルバイトを引き受けた。

八月三日、月曜日。なぜか朝から気分がざわついていた。奥さんの出産予定日の前日。俺のバイトも終了間近。そんな思いがあるからだろうか。鈴香と遊んでいても、じっとしていられなくなって大きく伸びをしたり体を揺すってみずにはいられなかった。

鈴香のほうは俺が体を動かすと、お遊戯でもしてると思うのか、前に立って「ぴょーんぴょーん」と同じように動いてみてはきゃっきゃっと笑っていた。

「鈴香、口ばっかで、跳んでねえじゃん。ほい、ぴょん」

俺が抱えてジャンプさせてやると、鈴香はおもしろがって、何回も「ぴょん！　ぴょん！」と俺に持ち上げるように催促した。

「お前、自分で思ってるより、重いんだからな」

「ぴょん！」

「はいはい」

「ぴょーん！」

「お前、掛け声だけは立派だな」

鈴香は大きな声を出すくせに、まるで跳ぼうとはせず俺に体を預けて持ち上げてもらうのを待っている。

「ぴょんぴょーん！」

「まったく、なんてやつだ」

鈴香と遊んでいると気もまぎれたけれど、昼ご飯になるとまたそわそわと心の中が浮き立った。

なんだろう、この感じ。小学校や中学校の卒業前のような心地。いや。違う。俺は学校に思い入れなどなかったから、卒業に至ったってなにも感じなかった。入試前やけんかに呼び出されたときの緊張感。それとも違う。嫌なことの前の重苦しさではない。落ち着かないようなどこかぽっかりと穴が開きそうな……。そうだ、駅伝の県大会で最後の坂を走ったときだ。ゴールが見える安心感と同時に、誰にも抜かれてはいけないという張り詰めた空気が俺の中には迫っていた。そして、そこにはこんなふうに走るのはもう終わりなんだという決定的な寂しさがあった。①あのときと、どこか似ている。

②「ぶんぶ！」

鈴香に大声で呼ばれ、俺は慌ててご飯を口の中に入れてやった。

「いしーね！」

鈴香はご飯で膨(ふく)れた頬(ほお)を自分で触りながら、そう言った。

③「いしーいしー」と言っていた鈴香は最近、「おいしーね」と同意を求めるようになってきた。並んで同じものを食べるのはあと数回。

今日は豚こま肉をカリカリに焼いて野菜と和(あ)えてご飯にかけたどんぶりが昼食だ。俺もすっかり薄味(うすあじ)になれて、この味つけをおいしいと感じる。

「確かにうまいな」

俺も口いっぱいにご飯を押(お)し込(こ)んだ。鈴香は、感傷的な俺などお構いなしに、さっさと「ごーさまでった」と手を合わせると、食べきってもないのに椅子(いす)から立ってうろうろしている。

奥さんの退院予定は日曜日だ。バイトもまだ五日もある。ふさぎこんでいる場合じゃない。それまではするべきことがちゃんとある。

「おい。ったく、最後の一口まで座って食べろよな」

俺は歩き回っている鈴香を膝(ひざ)の上に座らせると、ご飯を口に入れてやった。

「いしーね！」

「それならじっと食べろよ」

「いしー、いしーね」

「はいはい。④お前は口ばっかだからな。あれ？　なんだ？」

俺がやれやれと［A］をすくめていると、スマホが鳴った。

突然(とつぜん)の着信音に驚(おどろ)きながらスマホを耳に当てると、すぐさま先輩の大きな声が聞こえてきた。

〈　中　略　〉

スマホを食卓に置いたとたん、俺の心臓(しんぞう)は一気に跳ね上がった。朝から感じていた落ち着かなさは、この前触(まえぶ)れだったのだろうか。なにも心配などすることはない。一日早く生まれるだけだ。そうわかっているけれど、出産と聞くと、手術と聞くと、どうしたって鼓動(こどう)は速くなった。

⑤「ぶんぶー」

膝の上の鈴香が俺の顔を見上げた。

「ああ、そうだ、お前にも知らせなくっちゃな。鈴香、お前の妹が今日生まれるんだって」

「いもーと」

「そうそう。妹。赤ちゃんな」

「いもーとー」

鈴香は先輩や奥さんに教えてもらっているのだろう。最近上手に言えるようになった「いもうと」を繰(く)り返した。

「俺たちはここで、待ってたらいいだけなんだけどな」

「いもーと！」

「そう。今日の夕方には妹に会えるぜ。それまではそうだな、

まあいつもどおりってことで」

俺にできることなどないのもわかっているし、先輩や奥さん、病院に任せておけばいい。それでも、落ち着いてはいられなかった。昼ご飯を片付けた後、お決まりとなっている絵本を読もうかと思ったけれど、とてもそんな気にはなれない。⑥今のこの跳ねている心臓で、もう暗記している絵本をじっと座って読むなんて無理だ。鈴香のほうも俺の緊張感が伝染ったのか、妹が生まれるというのがわかるのか、いつもなら昼ご飯を食べてしばらくするとうとうとするのに、目をしっかり開けている。

「じっとしてっと、よけい落ち着かねえもんな」

「ぶんぶー！」

鈴香はそのとおりだというように声を上げる。

「どっか行くか？」

「とっとー！」

「そう外。公園で遊ぶってのもなんか違うし……。そうだ、鈴香、神社行ったことあるか？」

「じーじゃー」

「神社な。近くにあるんだけど、行ってみっか」

公園に行く途中、郵便局の裏手に、神社がある。田舎だからか、農家の人が豊作を祈るからか、この辺りは神社が多い。駅伝大会の前日、あの日も俺は落ち着かなくて、夜、突然神社へとでかけた。まさかそのおかげではないだろうけれど、県大会に進出できた。⑦一応神様なのだから、今日だってそれなりの仕事はしてくれるはずだ。

郵便局の裏から続く坂道を上がり、木が茂った林の中、石段を十段ほど上がったところに神社がある。小さな神社は、時々人が訪れているようで、きれいに整えられていた。

「よいっちょー、よいっちょー」

石段を鈴香は一段一段ゆっくりと上がっていく。不安定ながら、階段も一人で上れるようになった。俺が鈴香と過ごしたのは一ヶ月にも満たない。それなのに、言葉が増え、器用になって、手足も強くなっている。⑧鈴香にとっての一ヶ月は、俺の何年分に値するのだろう。いつからだろうか、俺はできることなど何一つ増えなくなった。それどころか、数学に理科。真剣に取り組むことに、仲間と作り上げること。できないことが増えていくばかりだ。って、俺まだ十六歳じゃねえか。なによぼよぼのじじいみたいなこと言ってんだ。と俺が自分を笑ってる間に、石段を上りきった鈴香が「ついたー！」と手を上げた。

「おお、鈴香。やるじゃねえか」

「でったー、でった」

鈴香は神社に入るや否やしゃがみ込むと、敷き詰められ

ている砂利を拾い始めた。白や黒や茶色。色とりどりの石が珍しいのだろう。拾ってはじっと眺めている。俺はその横で大きく深呼吸をした。

日差しが木々に遮られているからだろうか、神様がいる場所だからだろうか。ここはほかの場所の暑さや騒々しさがうそみたいに、ひんやりと澄んだ空気が満ちていた。鈴香は、そんなことなどおかまいなしでせっせと遊んでいる。

「どこだってお前は楽しいんだな。って、おい、こら」

俺は石を両手いっぱいに握りしめて、運んでいこうとする鈴香の手を取った。

「石は動かしちゃいけねえんだぜ」

「いしー？」

「そう。なんか、昔ばあちゃんが言ってた気がする。勝手に居場所を替えられると落ち着かねえんだって」

「ないない？」

鈴香は石でいっぱいにした手を俺に見せて、そう聞いた。

「そう。ないない。下に置いといてあげな」

「ないなーい」

鈴香は石をそっと足元に置いて、「ばいばーい」と手を振った。

「石の代わりにさ、これ、ぽいしようぜ」

俺はポケットから百円玉を出して、名残惜しそうに石を見ている鈴香に握らせてやった。

「ぽい？」

鈴香は百円玉をぎゅっと握ると、不思議そうに B をかしげた。

「そう。これを、あの箱にぽーいしてお願いすんだ」

「ぽーい」

「そう。鈴香、おいで」

俺は鈴香を抱きかかえると、賽銭箱の前に立った。拝殿はずいぶん古い建物で、木の部分は黒や灰色に変色している。雨風や暑さ寒さをしのいできた姿は重厚で、どこかありがたさを感じる。

「よし。この中に、ぽいして」

俺は腕の中の鈴香の手を取ると、賽銭箱の上へと導いた。

「ぽいぽい」

「そう。ちゃんと中に入れてな」

鈴香は俺の顔を見てから、お金をそっと目の前の箱に落とした。「無事に赤ちゃんが生まれてきてくれますように」と百円玉が落ちた音が聞こえるのと同時に、俺は心の中で唱えた。鈴香のほうは俺の腕の中で賽銭箱を必死でのぞいている。

「ないない」

「そりゃ、鈴香がぽいってしたんだから」

「ないーないー！」
「なくなったんじゃなくて入れたの」
「ぶんぶー！」
自分で投げ入れたくせに、手に握っていたものが見えなくなって鈴香は慌てている。
「あの百円は神様にあげたんだぜ」
「あーた？」
「そう。あげたんだ。百円渡して、その代わり、鈴香の妹が元気にやってきてくれるようにって頼んだんだ」
「いもーと」
「そう。元気でかわいい妹な」
俺は、鈴香に説明しながら百円でえらい願いをかけたもんだなと申し訳なくなった。もう少し金を追加するか。いや、なんかそれじゃ、取って付けたみたいでいやらしいかと思いながら見ていると、賽銭箱の横の棚に、お守りが売られているのを見つけた。
「なんだ。こんなちっちゃな神社なのに、お守りとか売ってたんだな」
何種類かお守りが並べられ、そばにお金を入れる大きな貯金箱が置かれている。人がいないんじゃ取り放題になりそうだけど、さすがにお守りを盗む人はいないのだろう。
「何を買おうか？」
俺が抱えたまま、お守りの前に移動すると、鈴香は物珍しさに、並んだお守りを触ろうとすぐさま手を伸ばした。
「こらこら。勝手に触んなって。どれにしようか。いまさら安産守りってのもちょっと遅いだろうし。学業成就、金運上昇……これはお守り買うほど重要なことでもねえな。あ、これいいじゃん。鈴香、いるか？」
布で縫われた赤ちゃんがついた小さなピンクの巾着型のお守り。子ども守りと書かれている。
⑨「ぶんぶー！」
俺が指すのに鈴香は大きくうなずいた。
「じゃあ、これにすっか。って六百円もすんのかよ。って、そんなに小銭持ってねえし。この箱お釣りなんか出ねえよな。おい、マジかよー」
俺は鈴香を下ろすと、箱にしぶしぶ千円札を突っ込んだ。願をかけるのには百円で済んだけど、鈴香を守るのにはその十倍もかかるのだ。
「はい。鈴香。大事大事すんだぜ」
お守りを渡してやると、鈴香は「やったー！」と手を上げた。⑩なんでも目新しいものを手にすると、すぐに顔をキラキラさせる。鈴香は「だーじ、だーじ！」と言いながらお守りを持って、あちこちちょこまか走った。

（瀬尾まいこ『君が夏を走らせる』より）

※出題の都合上、一部、文章を変えたり省略したりしたところがあります。

問一　――線部①「あのときと、どこか似ている」とありますが、どのような点が似ているのですか。もっとも適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　もう少しで鈴香の世話をするアルバイトが終わるほっとした気持ちや、最後まで無事にやりとげる責任を感じるとともに、もう鈴香と一緒に過ごす時間が終わってしまうという寂しさを感じている点。

イ　アルバイトも残りわずかになり、やっと鈴香の面倒を見る生活から解放される喜びとともに、先輩夫婦に最後まで迷惑をかけないように注意しようという思いと、この家に来るのもあとわずかだという寂しさを感じている点。

ウ　鈴香と一緒に過ごす時間のゴールが近づいてくる重圧と、特に大きな事故なく終われるという安心感と、鈴香との生活が終わりを迎えることに対する寂しさを感じている点。

エ　無事に奥さんが出産の日を迎えられることに感動し、鈴香を妹に会わせてあげたいという期待が膨らむとともに、妹の誕生が早まったことで残りのアルバイトの日数が減ってしまった寂しさを感じている点。

問二　「鈴香」にとって「ぶんぶ」とは自分の様々な意思や気持ちを伝える言葉です。――線部②「ぶんぶ！」、⑤「ぶんぶー」、⑨「ぶんぶー！」とありますが、それぞれの場面で「鈴香」は何を伝えようとしているのか考えて、五字以上十字以内で答えなさい。

問三　――線部③「『いしーいしー』と言っていた鈴香は最近、『おいしーね』と同意を求めるようになってきた」とありますが、この表現からはどのようなことがわかりますか。適当なものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア　もともとは他人であった「俺」のことを、鈴香が身近な存在に感じるようになったということ。

イ　「俺」の料理の腕前が上がり、食事の時間だけが鈴香の機嫌の良い時間になっているということ。

ウ　「俺」が一緒に過ごした短い期間にも、鈴香は大きな成長をとげているということ。

エ　「俺」が繰り返し鈴香に教えたため、鈴香の使える表現が大幅に増えているということ。

オ　鈴香が、日常の生活のなかで「俺」と食事する時間を一番大切に考えているということ。

問四　――線部④「お前は口ばっかだからな」とありますが、「俺」がこのように考える根拠となる「鈴香」の行動を、食事に関すること以外で文中から一つ取り上げ、三十字以内で説明しなさい。

問五　文中の［A］、［B］にあてはまる語としてもっとも適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア　首　　イ　肩　　ウ　手　　エ　足　　オ　口

問六　――線部⑥「今のこの跳ねている心臓」とありますが、このことから「俺」が今どのような状況にあることがわかりますか。もっとも適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　奥さんの手術に駆けつけることになった先輩のことをひどく心配している状況。
イ　手術のことを理解した鈴香の緊張が移り、落ち着いて座っていられない状況。
ウ　朝から自分の予感していたことが的中したことに、驚きを隠せない状況。
エ　予定よりも早い出産で、無事に生まれるかどうか気になって仕方がない状況。

問七　――線部⑦「一応神様なのだから、今日だってそれなりの仕事はしてくれるはずだ」とありますが、「それなりの仕事」とは具体的にどのようなことですか。二十字以内で答えなさい。

問八　――線部⑧「鈴香にとっての一ヶ月は、俺の何年分に値するのだろう」とありますが、この「俺」の思いは鈴香のどのような様子を表していますか。十五字以内で答えなさい。

問九　――線部⑩「なんでも目新しいものを手にすると、すぐに顔をキラキラさせる」とありますが、鈴香は神社でお守り以外にどのような「目新しいもの」を見つけましたか。文中から七字で、そのまま抜き出して答えなさい。

二　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

大学一、二年生に向けた大人数の授業では、私が医療現場や貧困地区の子育て支援の現場で行ってきたインタビューを題材として用いることが多い。そうしたとき、学生から次のような質問を受けることがある。

「先生の言っていることに①客観的な妥当性はあるのですか？」

私の研究は、困窮した当事者や彼らをサポートする支援者の語りを一人ずつ細かく分析するものであり、数値による証拠づけがない。そのため学生が客観性に欠けると感じるのは自然なことだ。一方で、学生と接していると、客観性と数値をそんなに信用して大丈夫なのだろうかと思うことがある。「客観性」「数値的なエビデンス」(注1)は、現代の社会では真理とみなされているが、客観的なデータでなかったとしても意味がある事象はあるはずだ。

数値に過大な価値を見出していくと、社会はどうなっていくだろうか。客観性だけに価値をおいたときには、一人ひとりの経験が顧みられなくなるのではないか。

とりわけ気になるのは、数値に重きがおかれた結果、今の社会では比較と競争が激しくなったのではないか、ということだ。先にもあげた私の授業では、対人援助職のみなさん、そして身体障害の当事者、薬物依存から刑務所を経験した方、差別を受けた方といった人たちをゲストにお呼びしている。大学に入ったばかりの若い学生を前にして、生命とは何か、死を看取るとは、［A］差別や障害はどのように現代の日本において問題なのかを考えてもらうようにしている。そこで学生から次のような質問を受けることがある。

「誰でも幸せになる権利があると言うが、②障害者は不幸だと思う」

そもそも障害とはなんだろうか。しばしば impairment(注2) が器質的な欠損としての障害であるのに対して disability(注3) は環境が整っ

ていないがためにできないことが生じてしまう障害を指す。

地方で生活している人が、自家用車を持たずに不便であるときに「障害」という言葉は使わないだろう。[B]エレベーターがないと上の階に上れない車いすユーザーは「障害者」と呼ばれる。エレベーターという環境さえ整えば不便は生じないはずだ。disabilityとは③このような事態である。環境の整備によって、ある場面では障害が生まれ、ある場面では生まれない。あるいは、ろうの人たちは、ろう者のグループのなかでコミュニケーションを取るときには不自由はない。ところが聴者の社会に入った途端に「聴覚障害者」として不便を被り場合によっては差別を受ける。[C]disabilityとしての障害から考えたときには、環境を整えるか整えないかという社会の側の姿勢が問われるのだ。

もし「障害者は不幸だ」としたら、それは社会の側の準備の問題である。さらには、幸せ／不幸せの基準をどこに置くかを他人が判断できるのだろうかという疑問も残る。

貸困について議論をしていた授業で、生活保護をめぐってこんなコメントが来たことがある。

④「働く意思がない人を税金で救済するのはおかしい」

私たちは汗水垂らして働きながらわずかな収入を削って税金を納めている。たしかに苦労している私が払った税金で「働く意思がない人」を助けるというのは腹立たしいかもしれない。

でも、もしかすると、「働く意思をもたない」人にはなにかの事情があるのかもしれない。フィールドワークのなかで、うつ病で朝起きることができないひとり親家庭にであうことがあった。その母親は、パートナーのDV(注4)から子どもを連れて逃げてきて、暴力の後遺症でうつ病に苦しんでいた。

精神障害や発達障害といった事情ゆえに、安心して働く環境を手にすることができないならば、それは社会の側が排除しているのかもしれない。働きたいと一度は思ったが、働けるチャンスがないため働くことをあきらめる人もいる。社会のほうが、働きやすい環境を作ることを困難にしているのだとすると、社会が生活を支えることは自然なことだろう。

おそらく学生たちのコメントは私たちの社会の代表的な意見でもあり、私自身もかつては同じように考えていた。学生が、社

会的に弱い立場に追いやられた人に厳しいのは、そもそも社会の中に⑤そのような視線が遍在しているからだ。そして、その言葉のなかに社会をどのように考えていくとよいのか、どう行動したら私たち自身が生きやすくなるのかのヒントもある。そこで、本書では、私たち自身を苦しめている発想の原因を、数値と客観性への過度の信仰のなかに探る。

一見すると、客観性を重視する傾向と、社会の弱い立場の人に厳しくあたる傾向には、直接の関係はなさそうだ。しかし、両者には⑥数字によって支配された世界のなかで人間が序列化されるという共通の根っこがある。そして序列化されたときに幸せになれる人は実のところはほとんどいない。勝ち組は少数であるし、勝ち残ったと思っている人もつねに競争に脅かされて不安だからだ。

さらには、こういった社会への厳しい視線は、学生自身を苦しめている。［D］、自分自身を数字に縛り付けて競争を強いるからである。かつて私もそうだった。競争することが社会のなかで大事なことなのだと思いこんでいた。私が教える学生たちの多くも、競争へと駆り立てられ自分で自分を苦しめている。この数字と競争への強迫観念から解放されることで私自身も楽になった。

とはいえ数字を用いる科学の営みを否定したいわけではない。数字に基づく客観的な根拠はさまざまな点で有効であるし、それによって説明される事象が多いことは承知している。それでも、数字だけが優先されて、生活が完全に数字に支配されてしまうような社会のあり方に疑問があるのだ。数字への素朴な信仰、あるいは数値化できないはずのものを数字へと置き換えようとする傾向を問いなおしたい。

（村上靖彦「客観性の落とし穴」より）

※出題の都合上、一部、文章を変えたり省略したりしたところがあります。

（注1）エビデンス……証拠、根拠。
（注2、注3）impairment・disability……どちらも、日本語の「障害」を意味する語。
（注4）DV……家庭内暴力。

問一　文中の［A］～［D］にあてはまる語として、適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア　つまり　　イ　なぜなら　　ウ　むしろ　　エ　ところが　　オ　あるいは

問二　――線部①「客観的な妥当性」とありますが、

（1）「客観的な妥当性」があるとはどのようなことですか。もっとも適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　多くの人によって受け入れられ、支持されているということ。
イ　数値による根拠があり、誰もが認めざるをえないということ。
ウ　誰もがそうあるべきだと考える理想的な考えであるということ。
エ　自分が疑いなく正しいと心から信じているということ。

（2）次にあげる例のうち、「客観的な妥当性」が認められると判断できるものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア　自分とA子さんとは、中学校の3年間ずっと同じクラスなので、仲の良い親友である。
イ　彼の体重が5キロも増えたのは、甘いものばかり食べて、あまり運動をしないからに違いない。
ウ　アンケートの結果、国語が好きと答えた人は95％だったので、回答者のほとんどは国語が好きと言える。
エ　将来、医師になりたいので、医学部に合格するためには、一日5時間、勉強をがんばらねばならない。

問三　――線部②「障害者は不幸だと思う」とありますが、この意見について、筆者はどのように考えていますか。筆者の考えとしてもっとも適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　障害者が不幸であるかどうかは、その人個人の問題であり、どちらかに決めることは難しいと考えている。

イ　障害者が不幸であるのは、その人が暮らす社会によるので、障害者だから不幸とは限らないと考えている。

ウ　障害者が不幸であるという考えは明らかな誤りであり、不幸であると考える人はいてはならないと考えている。

エ　障害者が不幸であることは認めざるをえない一面であるが、不幸にならない努力をすべきだと考えている。

問四　――線部③「このような事態」とありますが、具体的にはどのような事態を指していますか。「～事態。」に続くように、三十字以内で答えなさい。

問五　――線部④「働く意思がない人を税金で救済するのはおかしい」とありますが、この意見に対して筆者は「救済してもおかしくはない」と考えています。筆者が「おかしくない」と考える理由がまとめて述べられている一文の初めの五字をそのまま抜（ぬ）き出して答えなさい。

問六　――線部⑤「そのような視線が遍在（へんざい）しているからだ」とありますが、

（1）「そのような視線」とはどのような視線のことですか。「～視線。」に続くように、十五字以内で答えなさい。

（2）「遍在している」とありますが、「遍在」のここでの意味としてもっとも適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　広く、あちらこちらに存在していること

イ　あるところにかたよって存在していること

ウ　それほど多くは存在していないこと

エ　少しだけであるが確実に存在していること

問七　――線部⑥「数字によって支配された世界」とありますが、どのような世界のことですか。「～世界。」に続くように、三十字以内で説明しなさい。

問八　次の各文が、筆者の主張として適当であれば「○」、適当でなければ「×」を答えなさい。

ア　数字によって示された結果は、間違（まちが）っていることもあるので、それに対して疑いを持つことが重要である。

イ　何ごとも数字だけで判断するのではなく、数字では表せないことにも目を向けるべきである。

ウ　社会的に弱い立場の人でも、社会のあり方が変われば快適に生活をすることもできるはずである。

エ　障害者がよりよく暮らすためには、その人自身が努力をすることで社会を変えていくことが必要である。

オ　数字だけを重要視することは、競争社会を助長することにつながり、不幸せな人を増やすことにもなる。

カ　客観的な妥当性は多くの人が認めるものであり、現代の私たちの生活に欠かせないものである。

三　次の短文中の――線部のカタカナを漢字に直しなさい。

1　あえて無関心をヨソオう。
2　畑をタガヤす体験をする。
3　フウリュウな庭を散策する。
4　シャオン会に先生を招く。
5　彼女と同じドヒョウに立つ。
6　途中（とちゅう）で機械をテイシさせる。
7　絵本をロウドクする。
8　薬のコウノウを調べる。
9　理解がヨウイではない。
10　フウキの乱れを正す。